

衛兵治太内宮 物語

池上堰・久野堰の開鑿

(荻窪用水が届かなかった、池上村、久野村)

別 生

1 はじめに

『国を治めることは、水を治めること』という。釜無川と御勅使川の急流を、信玄堤で治めた武田信玄がそうであった。そしてここ小田原藩の治政も、治水することから始まった。後北条に代わり小田原を治めた大久保忠世・忠隣が、はじめに打った一手は、酒匂川を治めることであった。大口土手の大工事は、流路を変えることによって新田開発を行い、増産・増収が第一のねらいだった。それと同時に、農業用水の建設も手掛けた。

ここでは小田原藩時代の、種々水系の農業用水を見つめながら、最後まで「水」に取り残された幕末の久野・池上地区に焦点を当ててみたいと思う。

2 小田原の農業用水

① 酒匂川系の用水

【左岸の用水】

酒匂堰 川筋を変更する大口堤の工事は文禄二年(1593)に始められた。酒匂堰は農業用水としての役目は勿論のこと、工事中の排水路のネライもあり、完成は本流の完成より早く慶長八年(1603)であった。西大井を起点にして国府津村まで約10キロに及ぶ酒匂堰は23カ村の田地を潤した。大口堤が完成、本流流路が確定したのは慶長十四年(1609)であった。

【右岸の用水】

穴水門堰・**根又堰**・**武永田堰** 等多くの水路が開かれた。しかし大久保忠世・忠隣時代に完成したこの大口堤は、何回もの洪水【万治三年、寛文十年等】で決壊、その度に用水の流れは変化した。

② 早川系の用水

小田原用水 創設は16世紀、北条の時代であるから古い。主なる用途は飲料水ではあるが、一部灌漑用水としても使用された。時代は下り、明治二十一年夏、板橋の水田の水が枯渇し、村民が田地への灌漑を優先したため、府内への水が不足。板橋と府内が対立する水争いがあった。

荻窪用水 久野村、荻窪村の水不足解消が目的で行われた、小田原藩の事業であった。藩の援助のもとで、川口廣造は世話人として工事を指揮した。工期は5年ほどで、完成は享和二年(1802)という。しかしこの完成は計画とは違い、荻窪まで用水は届いたが、約束の久野村、池上村に水が届かないまま工事は終了となった。

③ 久野川・山王川系の用水

久野川の下流の山王川を中島村、池上村に分水した記録がある。しかし小規模で名まえがつくようなものではなかった。上流の久野川もはっきりした堰はまだなく、宮入堰・三宅堰は明治以後になってからのものである。



用水	完成年
小田原用水	16世紀前半
酒匂堰	1603年
穴水・武永田堰	1600年前半
穴部用水	1661~1672年
深良用水	1670年
瀬戸堰【山北】	1782年
荻窪用水	1802年
尊徳堀【悪水抜】	1840年
池上堰	1853年
久野堰	1867年

④ 狩川系の用水

穴部用水 酒匂川、久野川の水末地帯の網一色、山王原、中島の村々は長いこと米作の灌漑用水路は悲願であった。この水末の村々と井細田、多古村など合わせて10村の用水として開削された。

取水口は穴部にとり、山寄りに掘削し、甲州街道を川筋として、井細田村より町田村を経て網一色にて酒匂川に合流させた。開削の年代ははっきりしない。しかし、寛文年間（1661～1672）の開発工事であったと思われる。

3 取り残された池上村、久野村

① 池上村



【写真は眼蔵寺前の水路。「そらし水門」で水路の先は山王川である】

隣村の荻窪には用水が通い、川向うの中筋の竹松、曾比村では尊徳趣法による田畑改良が村民総出で行われる中、池上地区は相変わらず水不足が続く。天保期、藩当局は一貫して村の開発、再開発の意思を示してきた。しかし藩は開発を奨励はするが、積極的援助は示さない。事業は村民の労力と資金と責任で、ということになる。

池上地区は屋敷、田畑を含めて13町8反といわれ、土地は狭くあまり豊かな村ではなかった。その上、久野川からの水を多少、水田に引き入れることはあっても十分な水量とは言えなかった。隣村のような用水は、この村の悲願だった。

そこで、穴部用水を玉宝寺（五百羅漢）の上で分水、白山丘陵をトンネルで掘り抜き、水を池上村に引水しようと計画した。この工事は池上村の名主であった宮内太治兵衛が村民をリードして進められた。

荻窪用水から50年、計画から9年かけて

天保十五年（1844）に計画され、工事は嘉永二年（1849）に始まり嘉永六年（1853）四月八日に完了。この間9年を要した。最大の難工事は白山丘陵を坂下に掘りぬく119間（214m）の工事だった。当時の人足帳によると、池上村だけでなく穴部村等その他の村民も工事に加わった。

待ちに待った水路完成は、荻窪用水完成から50年もたっていた。

20両のつもりが41両

以前、水田と畑が同じ面積で、細々と暮らしていたこの村は、用水路完成で水田耕地が畑の三倍の村に生まれ変わった。

その上、用水の開発によって、池上だけでなく井細田、久野、荻窪、寺町、多古の村々も大きくこの恩恵に浴することが出来た。

藩がどの程度資金援助等をしたか、資料がない。しかし、江戸時代末期の小田原藩は海防に始まり、嘉永・安政の連続地震、さらに維新へと藩政多難、財政的にも困難な時であったことを考えれば、藩は消極的対応であったと見てよいと思う。それに比べ、農民層は活発な動きを示した。

当初、住民負担分は20両の見積もりであったが、トンネルの工事が難工事であったため41両もかかってしまった。宮内太治兵衛は、そのうち19両を拠出したという。

② 久野村

池上用水が完成して10年。荻窪用水完成からは60余年、未だに水不足に苦しむ久野地区の人々はどうしたのであるか？

とうとう藩を頼らず自分たちで行動し始めた。白羽の矢を立てたのは、先の『池上堰』で実績のあった宮内太治兵衛であった。『久野堰』の着工年代は明らかではないが文久二年(1862)ごろ、完成は慶応三年(1867)。5年にわたる大工事だった。

水源は何处から？

久野に引く水は、近くを流れる久野川でも、隣村まで来ている穴部用水でもなかった。水源は遠く塚原村下河原の湧水に求めた。これは、ただ単に久野川、穴部用水の水量が限られていたことだけでなく、水利権の問題や政治的課題があったと思われる。

水源の下河原(塚原)は今の岡本中学の南側にあり、湧水の多いところである。当時は自然に湧き出る水の流れが、小川となり灌漑用水として使われていた。この水を狩川の淵で集め、久野まで送ろうとしたのである。

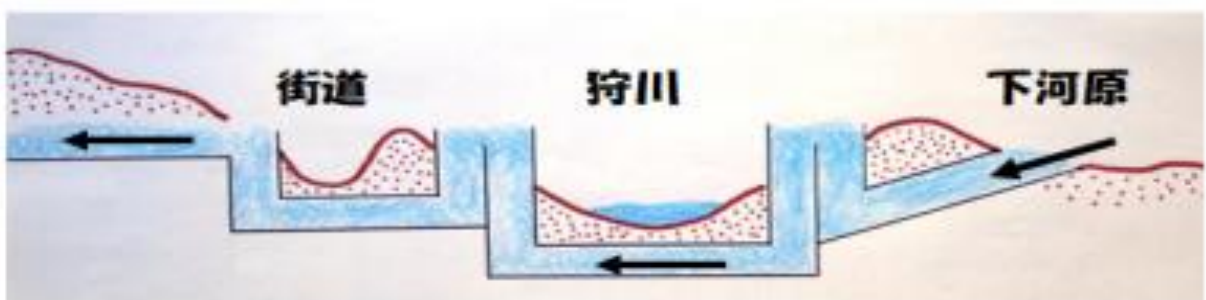
取り残された、久野



標高差は、たった5メートルだけ

川底をくぐり ⇒ 街道の下をくぐり

「吹上樋」で、水位を保ちつつ



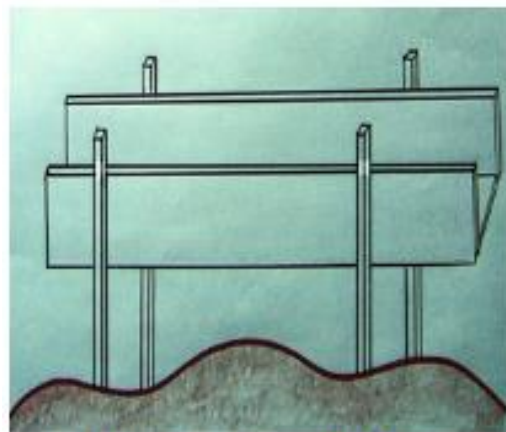
「吹上樋の理論」で、川を越え、道を越えて

水源の標高25mから久野20mまで、標高差はたったの5m・・・とすると、なるべく水位を保ちながら流したい。そこで考え出されたのが『吹上樋の原理』の応用。

取入口の竪樋口の広さより、出口の竪樋口は狭くなっている所がミソ。水位は入口、出口ほぼ同じになることを利用したのである。

狩川の淵の豊富な湧水を高さ3mの竪樋に集め、その水位を保ちながら川の対岸の竪樋に、さらに水位を落とさずに道（甲州街道）を越え三番目の竪樋に送る。そこから久野まで延々5キロの水路が延びる。*竪樋のことを、地元では『たむろ』と呼んでいる

箱樋【掛樋】の水位は、街道の高さよりも、また狩川の水位よりも、遥かに高い。この「高さ」こそ、『たむろ』を使った第一の理由であった。



小川や田んぼは、掛樋で越え

水路は一直線に

久野までの距離は5キロ。水漏れなく送るためには直線の水路がよい。そのためにトンネルを4

本掘った。しかしまだ課題はある。それは掘割を作ると、すでに開発され耕作している村々の田畑が削られるわけである。藩としても年貢は減少するし、地元農民も黙ってはいない。

そこで、宮内たちは地上に『掛樋』を多用して延々5キロ、落差5mを乗り越えた。

水を確実に送りたい！



- ・ 短距離で送りたい
⇒山、丘をくりぬき
- ・ 水量が減らないか
⇒トンネルのヒミツ



【写真は、一本松隧道の岩原側入り口。現在でも水が湧いている】

トンネル抜けると水が増える！

水を遠くまで送るとなると、失水することが当然予想される。水源の湧き水の量も限られている。これをトンネルで解決した。箱根に続く久野丘陵すそ野の、塚原、岩原、穴部からの湧水がネライだった。

トンネルを抜けるたびに、湧き水が加わり水量が増えた。400m以上のトンネルが4本。その穴の大きさは縦1.5m。この4本のトンネルは、ただ水路を直線にするためだけでなく、水量増量のことまで読み込んだ計画だったのである。

《久野堰水路想定図》



西念寺裏の隧道出口



1号古墳下久野出口



- *水路全コース踏査したが、不明な個所が数多い。特に「掛樋」を用いた個所は追跡が困難であった。
- *記念碑は郷土史家、保田宗良、浜野愛之助、立木望隆さんたちが建立したものである。

おわりに

荻窪用水完成から65年。藩の約束はとうとう実行されずに終わった。この願いを実現したのは、村民の熱意と、それに押された一人の人物であった。何世代にもわたり近隣村々の発展を横目で見ながら、じっと耐えた人々の思いを、受け止めた宮内太治兵衛という人物・・・その実行力と、格別の技術力はただ者ではない。

『池上用水』『久野堰』の水路を作っただけではない。「小田原城、廃城」と聞いて、すぐに城にある藩の宝物を手に入れようとするもの、そして城そのものを買う者までいたという。しかしこの太治兵衛の目の付け所は違っていた。「城堀を水田に変える」ことを思いつく。城の周りに水田3町3反が出来た。明治四年の秋、初収穫。小田原の一等地に黄金色の稲が実る。

晩年になっても動きは続く。成美館（後の足柄小）の建設準備、そして怒田村の高橋貞次郎と「酒匂川に船を通す」ことを発案。『米、野菜、材木などの荷物をつけ』『役人、農民、子どもたちを乗せ』船が広い酒匂川を下る姿を想像するだけで楽しい。残念にもこの計画は、実行には至らなかったが、人々に希望と元気を与える65年の人生だった。

明治十一年没。菩提寺は生家近くの正法山眼蔵寺。

八角柱の台の上に、二段の円柱が立つ墓石。当時としてはオシャレで、アカぬけた石柱の下で今、眠っている。